

HKFA Technical Report

平成29年度 第96回 全国高等学校サッカー選手権大会 北海道大会（決勝）

開催日時

平成29年10月21日（土）
～10月29日（日）

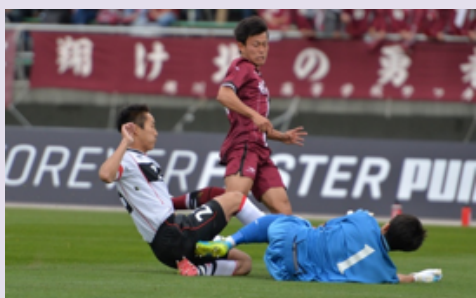
会場

旭川市 東光スポーツ公園球技場
旭川市 忠和公園多目的広場
東川町 ゆめ公園サッカー場
札幌厚別公園競技場（決勝）

北海道 大谷室蘭 高等学校	(0 - 1) (0 - 2)	旭川実業 高等学校
	0 - 3	

TSGメンバー

神田法人 (U-12)
熊谷朋也 (U-12)
柴田晃宏 (U-14)
塚田泰成 (U-16)
舟田彩一郎 (GKP)
小林俊成 (一貫指導)
宮永裕教 (TSGチーフ)



1 大会の概要

本大会は、北海道の高校に所属するチームのナンバーワンを決める大会であり、北海道の各地区を代表する29チームの高等学校によるトーナメントである。北海道のサッカー文化としては、プリンスリーグを超える大会であり、今年度で96回を数える歴史ある大会である。

＜HKFA 2種委員長・競技副委員長 荒忍氏＞

今年度もトーナメントを勝ち上がるにつれ、サッカーとしてのレベルアップが見られました。

地方の伝統校については、安定した力を毎年見せており、北海道のサッカーのレベルアップに寄与する部分大きいと考えています。

決勝戦に進出した大谷室蘭と旭川実業には、特長のあるタレントが揃っています。また、それに加えて個々のディフェンスの能力に長けており、バリエーション豊かなバイタルへの侵入方法を持っているのが両チームの特徴だと思います。

このようにプレーのバリエーションと意図を持ったプレーの連続が、伝統あるこのトーナメントでも見られるのは、プリンスリーグで実力を積み上げてきた成果ではないかと思います。決勝戦については、個人と組織、その両面の良さが表れるようなサッカーを期待したいと思います。

2 両チームへのインタビュー（試合前）

＜旭川実業監督 富居徹雄氏＞

準決勝では、駒大苫小牧さんが強固な守備でゲームを構築してきました。前半はその守備を崩せずにはいましたが、後半は相手DFラインに近づくことを、どのゾーンからでもよいからやっつけようという指示をし、修正できたと思います。私たちは、個の部分で力があるチームではないので、全員で攻守に関わっていくことをベースに決勝に臨みたいと思いま

<大谷室蘭 及川真行監督>

この決勝戦では、今までやってきたことを継続して力を出し切りたいと思っています。

攻撃面では、積極的なプレーでゴールを目指していきたいと思います。守備については、積極的にボールを奪う、ゴール前では体を張って守るなど、日常から取り組んでいることを当たり前に行っていきたいと思っています。

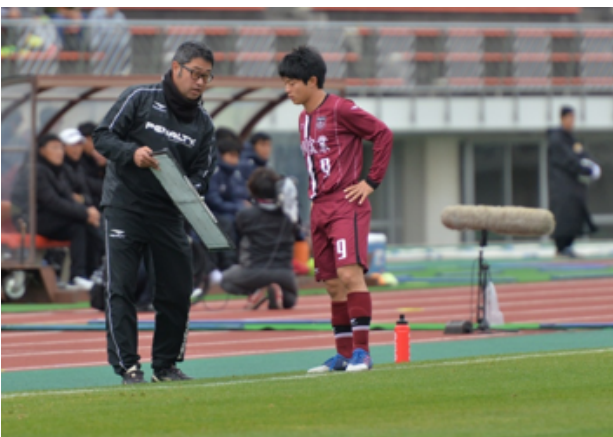
3 分析

<全体>

今年度高体連の決勝戦のカードの再現となり、リベンジを果たしたい旭川実業と、再び優勝を勝ち取りたい大谷室蘭の激闘が期待される一戦となった。

ゲームは強力なサイド攻撃を武器に静岡学園を倒してインターハイベスト8の結果を残した旭川実業の両サイドを警戒した大谷室蘭が、前日とはシステムと戦術を変えてゲームに臨む。それを感じ取った富居監督が攻撃の戦術変更を前半に即座に指示するといったように、共にプレーの強度（インテンシティー）のみならず、戦術的なプレーの強度も感じさせるレベルの高い試合となった。

試合は、前半に旭川実業が得点して折り返すと、後半開始すぐに旭川実業が正確なクロスから鮮やかなボレーを決めると、大谷室蘭が守備の立て直しを図り怒濤の逆襲も見られたが、得点のために前がかりになった大谷室蘭の背後を速攻で突き試合を決めた。



<成果>

①サイド攻撃

クロスボールに高低や緩急、回転をかけたあたりといった意図的な変化をつけたプレーが見受けられた。中の選手の動きの質についてもタイミングよくマークを外すことを意識し、これが決定機に度々結びつくなど、サイド攻撃が得点につながる場面は多くあった。

②ビルドアップと攻撃の流動性

トーナメント戦というレギュレーションの難しさにおいても、判断なくロングボールを放り込むのではなく、GKから攻撃を組み立てるプレーが多く見られた。

ビルドアップについては、相手DFの状況を観ながら流動的にポジションを変化させたり、縦の関係のコンビネーションから、相手のライン間に侵入し、攻撃の糸口を作ることを意図的に行っていた。

<課題>（攻撃）

①パス&コントロールの質

これまでも課題となっているが、北海道のチームが全国で勝ち抜くためには、より一層のパスとコントロールの精度向上が必要である。決勝のゲーム中だけでも、ミスパスやコントロールのミスがなければ得点に繋がっているような場面が散見された。

②アタッキングサードの崩し

相手のアタッキングサードまでボールを前進するところまでは行くが、守備のブロックを崩せず、なかなか決定機をつくることができなかった。上記のパス&コントロールの質の向上はもちろん、意図的に相手を集結させるワンツーマンや、3人目の動きとアイデアをより高い強度の中でも発揮できるスキルを身に付けたい。

世界基準を日常に
日本のトップレベルを目指す北海道
5ブロックでの一貫指導体制の構築



<課題> (守備)

①ボールへのプレッシャー

オフザボールの時に、すぐにプレスに行くことができるポジションに常にいないため、簡単に前を向かせてしまうプレーが多かった。

状況によっては前を向かれていないこともあるが、良いプレッシャーをかけることができたことが理由ではなく、攻撃側がターンができる状況であっても、そのプレーを選択しなかったなど、攻撃側に起因するもので、良い守備をしていたからではなかったのではないかと感じた。

②ヘディング

ヘディングの競り合いの技術については、伸びているとは言いきれない。

決勝において、GKからのロングボール（ゴールキック、クリアーも含む）を競り合った回数が前半12回、後半22回のうち、DF側がクリーンに競り勝ったのはそれぞれ前半が3回、後半は11回であった（ヘディング成功率：前半25%、後半50%、トータル41.2%）

このことは、ボールを失わず、むやみにロングボールを放り込むことが少なくなっている裏返しかもしれないが、サッカーにおいて制空権を握ることは重要であり、この年代でパワーをもったヘディングが出来ることはもちろん、空中にボールがあるうちに周囲の状況を把握し、味方にヘディングでパスが出来るスキルも身につけておきたい。

4 データ

HKFA TSG データ比較	高校選手権2015	高校選手権2016	高校選手権2017
ポゼッション	36	31	38
4回以上成功回数を計測 目標の目安～10分で5回成功	(前半22 後半12)	(前半19 後半12)	(前半23 後半15)
スローイン	成功16 失敗20	成功20 失敗33	成功23 失敗18
成功率（目標の目安50%）	32%	37%	56%

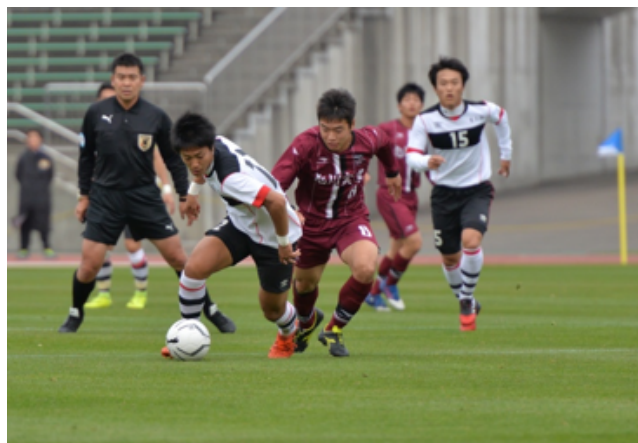
<データ>

①ポゼッション

ポゼッションについては、昨年度より成功回数が向上した。両チームの戦術的な差が影響しているが、全体的にGKがノージャッジでキックだけをする事なく、状況を判断して味方にパスを繋げて、ボールロストをしないように意識しているチームが増えている。ただし、あくまでもゴールをすることが目標であり、前進やシュートチャンスであるのにも関わらず、それを選択せずにパスを選んでいる場面が見受けられた。

②スローイン

スローインは目標の目安となる50%も超え、昨年に比べ大きく成功率が向上した。守備の質が、やや攻撃のリアクションとなった時間帯が多かったため、スローインへのボールを激しく奪いに行く場面が少なかったことも一因と考えられる。また、コーナキックは色々なパターンをトレーニングで落とし込んで来ていたが、スローインは大きな工夫はあまり感じられなかった。セットプレーとしてのスローインの精度をより向上させることが今後の課題となるのではないかと。



5 GKのプレー

1 守備のプレー

(1) シュートストップ

正面からのシュートに対し構えるタイミングのずれはなく、ボールを一度で掴めている。しかし、ポジションを移動してシュートに対応する状況では、構えるタイミングがずれ、重心が後傾し、また角度がない位置からのシュートに対して、ニアサイド寄りにポジションを取り、確実なプレーができず失点していた。

(2) ブレイクアウェイ

ブレイクアウェイの回数は少なく、カバーリングの回数が多かった。ロングボールを中心に攻撃を組み立てる相手に対して、こぼれ球を処理する回数が多く、DFとの連携や判断、決断の速さが求められていた。

2 攻撃参加

(1) パス&サポート

成功率20% (10本中2本成功)

味方のバックパスから意図あるフィードで展開するプレーが見られた。今後は相手からプレッシャーを受けても回避できるテクニックを身につける必要がある。GKがサポートポジションを高くとり、チームでボールを前進させることに効果的に関われるように、多くの選択肢を持つこととテクニックの向上に努めたい。

(2) ディストリビューション

成功率17% (29本中5本成功)

スローイングでは、アンダーアームスローにより素早くショートパスを味方につなぐ場面やオーバーアームスローから前線の選手へパスが出されていた。サイドボレーキックやプレスキックなどのロングボールに関しては、キックの飛距離や精度など課題が見られた。GKがチームとしてボールを失わずに運ぶために、味方と素早くリスタートし、効果的にプレーするための習慣を身につけることも必要である。

6 両チームへのインタビュー (試合後)

<旭川実業監督 富居徹雄氏>

大谷室蘭さんが今までとシステムを変えてきて、前半10分位に少し修正を加えました。その後は前半20分位にうちの流れになってきたと思っています。良い時間帯で先制点を奪うことができ、後半開始早々にも追加点を奪うことが出来たことが勝利に結びついたと思います。

(全国大会では) 昨年は結果を出せていないので少しでも上に行きたいということが一つです。今回の全道大会では、自チームが研究されている部分が見えたので、そういった部分での改善を図り、大会に臨みたいと思っています。

<大谷室蘭監督 及川真行氏>

積極的に前からボールを奪いに行く狙いだったが、前半からカウンター攻撃を怖がってラインが下がり過ぎてしまいました。後半の立ち上がりから失点をしてからは、なかなか狙い通りに試合を進めることが出来なかつたです。来年はひとり一人の力を伸ばして、もっともっとチームとしてレベルアップをしていきたいと思っています。

7 まとめ

旭川実業は、夏のインターハイで北海道勢では23年ぶりにベスト8となりました。これは、各チームの監督をはじめ、これまで関わっていただいた各カテゴリーの指導者のご尽力に尽きることと思います。しかし、北海道サッカーのレベルがより向上していくためには、日常の質がより細かなところまで要求されるようなトレーニングのインテンシティーが必要であると考えます。最後になりましたが、HKFA 2種委員長荒忍様をはじめ、北海道高体連並びに当該地区協会の役員の皆様におかれましては、HKFA TSGの活動に多大なるご協力を賜りましたこと、この場を借りまして心より御礼申し上げます。